



TITLE:

都市とネットワーク

AUTHOR(S):

家島, 彦一; 応地, 利明; 高橋, 美紀

CITATION:

家島, 彦一 ...[et al]. 都市とネットワーク. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996, 16: 15-48

ISSUE DATE:

1996-04-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187552>

RIGHT:

都市とネットワーク

家 島 彦 一

はじめに

私は、これまでに「総合的地域研究」に関わる研究会に何度か出席してきたが、そこでの多くの議論は、「器」としての地域論、すなわち地域というものを所与の条件とした上で、生態環境・宗教・文化・権力などが地域性の形成とどのように関わるか、といった議論が優先していたと思われる。こうした地域の自立性とか内的結合性を中心とした議論の方向性は、そもそも研究の出発点が「東南アジア」という自然生態条件の上で強い特徴を持った地域を主な研究対象とし、また「地域研究」を研究手段としていることから、当然のことであろう。しかし、地域を区切る・繋げる・括る、のいずれの方法にしても、国家・領域・文明圏といった特定の空間を設定して、その独自性なり共通性や関連性を探るという作業は、結局は現在の国民国家の国境・境界をなぞったり、近代国家形成前の地域を掘り起こすための一連の作業に通じるものであり、いわば「器」をどのように区切り、合理的に分け合い、並べ、繋げるかといった議論であると言えよう。そうした器論に留まる限りにおいて、「重点領域研究」が目指している21世紀への提言としての「世界単位」という一歩踏み込んだ議論には繋がらないのではないかと、私は危惧している。つまり私は、世界全体がますます流動化し、大国の理念が崩れ、近代的国民国家の枠組自体が問われている現在において、今後の世界の在り方なり向かうべき方向は、地域主義とか国家主義が強化されるのではなく、様々な段階と過程があるにしても、狭い地域枠とか国家枠を超えて、いくつかの拠点都市、つまり情報収集と発信のための基地(key station/workstation)を相互に結ぶ intercity network のような一つの世界になるのではないかと私は心に描いている。従って、地理的枠組に結び付けようとするこれまでの「地域＝器論」から脱却して、器の中身としての人、担い手としての人間、人の動きとそのネットワーク(関係性)によって結ばれる様々な世界像を中心とした分析視角に注目すべきではないかと提案したいのである。

私のこれまでのイスラーム世界についての歴史研究を通じて、また中東地域、地中海やインド洋などの海の世界を実際に見てきた経験から言って、どうもイスラーム世界や海域世界は、今述べたような未来型世界に似たネットワーク型社会としての特性を強く持っており、個人から世界(全体)までが地理的境界に妨げられない開放性・流動性を強くもって、ダイナミックに外に膨脹・拡散し、また相互に交流関係を維持してきたといえよう。つまり中東地域、そしてイスラーム世界の社会・文化や歴史を考える上で、ヒトやモノ・情報の移動と交流、商業交

易、社会・文化の重層・多重性と流動性、人と人との関係によって結ばれる人間関係のネットワークなどが基本的な要素であり、地域とか土地・領土・国家・国境などの「器的なもの」は、いわば二次的なもの、弱い存在であることに気付くのである。中東でよく言われることであるが、土地とか地域は「人・水・安全」のなかに成立する二次的なものであり、それ以外の土地は「死んだ土地」であるとか、「所有権とか財産は土地そのものよりも実っているもの、生産物にある」と言われる。さらに、海域世界というものを考えてみると、文字通り土地、地域とは別の理念のなかで展開する海の世界であって、港と港、島と島とが相互にノード(単位、節、核)となって結ばれた緩やかなネットワークの世界、海上交通と人の移動の上にトレースされた関係性の世界、出会いの世界である。

そこで、私の本日の発表の目的は、これまでの「器論」の発想を逆転させる意味合いを含めて、「都市とネットワーク」に関するいくつかの話題を提供することにある。

I. 都市とネットワーク

(1) ネットワークとそのノード(核)としての^{メタ}原都市

人間は様々な他者との関係性のなかで自ら生き、また生かされていると言える。ネットワーク論は、そうした個と個、個と集団(社会、世界)の相互作用を分析するものであって、ネットワーク内のノード(単位)が相互に作用することで、互いに連結するときに成立する関係の在り方(形態と属性)から、ネットワークの性格を分析する。従って、ネットワーク論では、構造・機能の静態的分析とは違って、動態的分析(拡散・膨脹・可変・組み替えなどの開放性、多重・複合・重層などのヒエラルキー、方向性、時間性、質量等々の、言わば関係性[relations])、つまり「動きのダイナミズム」を明らかにすることに研究上の力点が置かれる。このネットワーク論は、歴史研究においても注目されており、とくに属人的な性格の強い中東イスラーム社会の分析にはラピドス(I. R. Lapidus)の研究に代表されるように、注目すべき多くの研究成果がみられる。つまり、多重多層なネットワークの網目のなかに機能する、流動的な中東の多重社会の実像を浮き上がらせ、同時に一国史の枠内で歴史展開を考えてきた研究の限界を乗り越えることに、研究の主眼が置かれているのである。

さて、都市とネットワークの問題に関連して、ネットワークのノード(単位、節、核)としての原都市、メタフィジカルな都市について考えてみよう。政治的都市、領域国家のなかの都市といった場合、その都市は予め計画され、指定された場所と構造を持っているが、関係性のなかに成立する原都市は、本来的には無の場所、空っぽの器であり、人の移動と交流によって

一時的に成立する街道上の一点、分岐の境、境域である。アラビア語に「サグル(thaghr)」という言葉があり、しばしば地名に付けられる名称である。この本来の意味は、異界との境、辺境、砦、中心、河口、港、市場などであるが、まさにサグルはネットワークのなかで成立するノード＝原都市に通じるものであると考えられる。このようにノードは、中心であり、同時に末端点でもあり、中間の拠点であり、同時に分岐点でもあって、伸び縮みするネットワークの一時的な点に過ぎないと言えよう。

ネットワークのノードとしての原都市は、多様なヒトが集まる情報・モノの交換の場、異質なモノの出会いと集積のなかで機能する場であって、そうした属性を備えることによって、別のモノ、新しいモノを創り出し、発信する場ともなる。つまり、原都市は、本来は目に見えないような「はかない場」であるが、同時に目に見えるもの(文明)を創り出す「確固たる場」ともなり得るのである。そして原都市はネットワークのノードとしての機能(出会い・集積・創造)を高めることで、その周囲の農業社会にも影響力を及ぼし、農業生産を支配するなかにおいて、ノードとしての都市機能を肥大化させていく。この意味において、メタフィジカルに見るならば、都市は農村に先行していると言えよう。

ノードの上に生まれた都市文明は、多様なヒト・モノ・情報のなかに成立した、いわば普遍化のシステムであって、ネットワークに沿って四方に拡大することで、その普遍化と多様化の過程を辿って行く。多くのノードを支配する大文明は、多様なネットワークを統合し、同時に内発的発展モデル(文化)、あるいは小ノードを挑発し、内発的発展モデル(文化)を再認識させたり、適合・不適合と融合・分離、多様化の現象をもたらす。

(2) イスラームの都市像と移動のネットワーク

以上のような原都市は、現実の中東やイスラーム世界の都市像に極めて近いものであると考えられる。もともと中東社会は、歴史的に古くから海上と陸上の接点、多様な人間集団の出会いと衝突の場、流通経済と都市社会の高度な発達を特徴とする、いわば「文明衝突と交流の主舞台」であった。しかも中東地域の周囲には、砂漠・ステップ地帯が広がり、そこには「移動」を定常的な生活形態としている遊牧民たちが住んでいる。従って、中東を中心とした歴史を振り返ってみると、常に大規模な「人間移動」が国家・社会・経済・文化を動かしてきたという側面を見逃すことができない。中東の都市は、そうした移動する人々が集まり、モノ・情報の交換の場、異質なものの出会いの場、接点、文明発信の基地であって、人間移動の世界が支えるノード(核)としての機能、つまり様々な移動する人間の「止まり木」としての開かれた機能を果たした。

現在、私はイブン・バットゥータ(Ibn Battūta)による『メッカ巡礼記』の邦訳作業を進めているが、それに関連していわゆる「リフラ(al-Rihla)」と呼ばれる多くの巡礼旅行記を読んだ。そうした旅行記を読んで率直に感じた一つの印象は、イスラーム世界は脱領土・脱国家化の進んだ一つの人間移動の世界、旅の世界ではないかという点である。つまりイスラーム世界はヒジュラ(移動・逃避)、リフラ(商売・旅・学問・修行)、ハッジュ(メッカ巡礼)、ズィヤーラ(聖地・聖廟の参拝)などの作用を通じて、人と人との相互に結びつき、個人・血縁・地縁・国家・世界を貫く共通の情報化・国際化と普遍共存を目指して活発に展開していたことが強く理解されるのである。その究極の理念的世界がウンマ・ムハンマディーヤとしてのイスラーム世界であって、個と世界との間が吹き抜けた状態にあると言える。

一人の人間が風呂敷一枚の荷物を持って旅に出て、巡礼キャラバン隊の仲間になる。キャラバン隊が遠方の町に着くと、そこには礼拝のモスクがあり、商売の市場(スーク)、宿泊のフンドクやキャラバンサライがあり、人の集まる広場(maydān/sāḥa)がある。また宗教的な修行と学問修得、宿泊の機能を備えたマドラサ(madrasa)、ハンカー(khānqāh)やザーウィヤ(zāwiya)がある。病院(bīmaristān)、公衆浴場(ḥammām)やカーディー法廷がある。このようにネットワークのノードとしてのイスラーム都市は、移動してきたよそ者を受け入れる様々な機関を用意し、町の人間も他者を積極的にもてなし、保護する心構えを持っている。アラビア語で、自分(仲間)と他者との間にある人間を呼ぶ言葉に、「近隣者・寄留者(al-mujāwirūn)」がある。これは「一時的に隣人愛(jiwār)のもとに置かれた人」の意味であり、その人は寄留先の仲間・集団と同じルール、同じ安全保護(himāya)のもとに一時の滞在が許可された人間である。こうした人間が長期的に滞在すれば、その本来の土地の人間になる可能性をもった、いわば「内と外の中間の立場にある人間」である。よそ者は、確かに危険な存在であるが、反面において新しい外の情報やモノ、技術や知識をもたらす客人であり、多様なネットワークを持った有益な人間である。『コーラン』のなかにも、「移動する旅人は、道の子(ibn al-sabīl)」であり、尊び保護すべき存在であることが繰り返し説かれている。この道(サビール)とは、旅、道、イスラームの教え、ある目的に至る過程であり、要するに様々なネットワークを意味している。旅する人の心を支えているのは、イスラームであり、旅そのものは純正のイスラームに近付くための修行と苦行の旅でもあった。

ムスリムの名前には、ニスバといって由来名が付いている。その由来名を見ると、生まれた地域、町、村の名前であったり、父親、叔父や祖先の生まれの場所、部族名であったりして、ニスバの定まった命名のルールがあったとは考えられない。興味深い点は、多くの場合、本人

が旅の過程で滞在した町、学問や商売のために旅して歩き、拠点とした都市名がニスバとして残されることである。例えば、14世紀の有名な伝記学者、メッカ地誌の著者である Muḥammad b. Aḥmad al-Fasī al-Makkī という人物は、モロッコのファースに生まれ、カイロとメッカに学び、ムジャーウィルとしてメッカに長期滞在した。この命名法からも明らかなように、移動する人間の地域性は多様であり、後で紹介するように、ハドラマウトのアラブ人は故郷にある墓が彼らの原点であり、末期^{まつご}の地であるとする強い観念もあるが、こうした例は稀であって、むしろ都市間を移動する旅の人生、一本の杖と一つの水壺を持った旅姿こそがすべての人生である、と考えるのが普通ではなかったか、と思われる。

ただし、人の移動は無秩序に行われるのではなく、動機・目的・交通条件などによっても、そのネットワークにはある程度の地域性が出てくることは言うまでもない。ネットワークの内容(種類)・範囲・頻度・持続・方向・時間などの点で、その濃淡と範囲が抽出される。私は、イスラーム世界のなかに、地中海とインド洋という二つの海域世界を設定し、両海域世界を繋ぐいくつかの交易ネットワーク軸を取り出し、それらの絡まりのなかで、その世界としての歴史的变化を捉えようとしている。

イスラーム化(Islamization)とは、移動する人間によって多様なイスラームが拡散していく過程であり、イスラームの都市ネットワークを通じて、地理的な広がりを持ち、同時に文化的格差を均質化・国際化し、普遍共存の理念であるウンマ共同体形成のための運動であると言える。しかし人の移動によって広がり、地理的な広がりを持つイスラームは、その拡散の過程で「多様なイスラーム・ネットワーク」を自ら創成し続けた。こうした多様な地域的イスラームを横軸のイスラーム・ネットワークとするならば、同時に縦軸のイスラーム・ネットワーク——言い換えるならば「大伝統のイスラーム」、「大文明としてのイスラーム」、「建て前としてのイスラーム」とも言える——があって、両者は常に反発しあい、革新運動を起こしつつイスラームそのものが揺れ動いている。イスラームのなかには、正統と異端の両軸を置き、相互にレフォームして行こうとする力強いエネルギーがある。そのレフォームの運動・努力・試練が多様なジハードの運動の原点になっていると捉えられる。以上のように、中東・イスラーム世界は、人の移動のための都市と都市を結ぶ各種の交通システムと文化的コミュニケーションのネットワークが高度に発達し、ダイナミックに展開していたのである。

Ⅱ．港市のネットワークと海域世界

(1) 港市と海域世界

ノード(核、拠点)としての港は、海域のネットワークを通じて様々な異界と接するフロンティアであり、同時に陸上の領域国家のネットワークのもとに囲い込まれた陸の拠点であり、その両者の「狭間の地」「サグル」に位置することによって、様々なヒト・モノ・情報の集積・拡散する出会いの機能を果たす。従って、港は陸の領域国家の直接の影響を受けるが、同時に海を通じて広がるネットワークを持つことで、陸の都市とは違った秩序のなかにある。陸の領域国家は、国内の後背地^{ヒンターランド}(陸上ルート、土地、人間、資源など)を支配する利点を生かして、強い力を持って港を支配すれば、外に開かれた港の自由な活動は妨げられ、港は海域ネットワークのノードとしての自由な機能を失う。したがって、港市国家(port of state)は、港と領域国家という二つのレベルの異なるネットワークの交差する微妙なバランス関係のなかに成立していると言えよう。

歴史的に見ると、多くの重要な国際港は、大陸と少し距離を置いた島嶼に発達した。それは海域世界のネットワークのノードとして、陸の領域国家による軍事的・行政的な影響を直接受けにくい場所にあるからであって、現在のシンガポールや香港のように、そこには様々な異人たちが寄り付き、多重多層のコスモポリタンな住地世界、独自のファッション文明を創造する可能性を持った場である。また同時に、異文化のなかの diaspora community は独自のコミュニティを維持するための文化伝統を強化する傾向も常に持っていることも注目される。そうしたことから、港には港社会の共通性と多様性、活力があると考えられる。

海域世界はノード(核・拠点)となるいくつもの港や島を繋ぐ交通ネットワークによって成立する交流の場、一つの世界であり、まさに未来型世界のモデルとして譬えられる場である。私が海域ネットワークによって成り立つ空間(世界)=海域世界を積極的に設定しようとするこの研究意図は、そこにイスラーム世界や未来型世界のモデルを想定しているからである。歴史研究のうえで、海域世界は、次のような特殊条件を備えていることによって、ネットワークと地域性の問題を考える興味深い研究対象となり得るであろう。

①海域という特殊な地理的条件によって、人間は造船術と航海術という特殊技術を使つてのみ、これを活動の場として利用できること。

②したがって、海域は、陸支配のような直接的支配が及びにくい領域国家の狭間にあって、国家枠に規制されない、また国家枠を超えた多様な人間の逃避と積極的な活動の場となり得ること。

③インド洋海域についていうと、ヴァスコ・ダ・ガマが喜望峰を回って、インド洋に進出した頃、南シナ海・ベンガル湾・アラビア海・インド洋西海域を連ねる、一つの海のルール、秩序が存在していた。そのためにアデン、ホルムズ、カリカット、マラッカなどに代表されるノードとなる国際的港市が発達し、それらが相互に港市ネットワークを持って連関し、共通の港市機能と性格を持っていたこと。16・17世紀のアラビア語史料によると、インド洋海域世界を表現する言葉として、「インド洋地域(Nahiyā Bahr al-Hind)」が使われており、この海域が一つの世界として捉えられていたことがわかる。

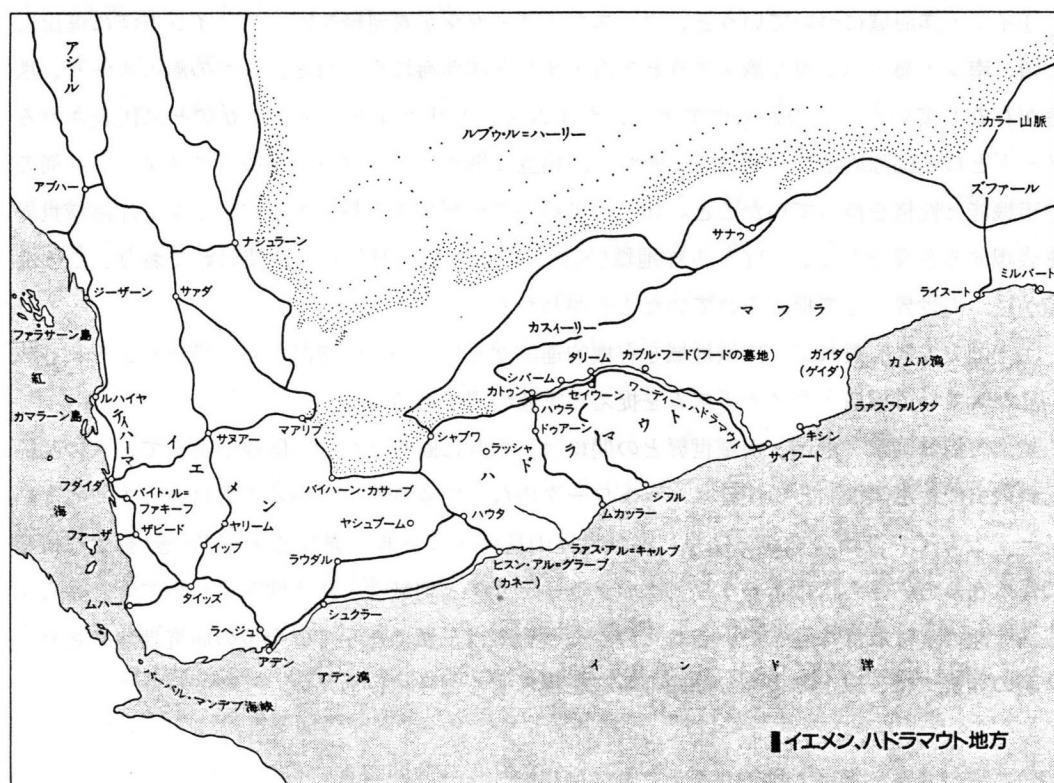
④一国史の枠を離れて、広域地域を有機的連関性を持つ一つの空間として設定し、それを成り立たせている構造とダイナミズムを捉える実験の場であること。

陸上の領域国家・港市・海域世界との間には、相互に断ち切れない関係があって、人の関係、取引取引や金融決済などの多様なネットワークのなかで成り立っていることは言うまでもない。ノードとしての港市の機能と性格、海域世界の秩序・ルール、異なるノード(港)を繋ぐ情報関係の在り方、さらにはネットワークのクライテリアと地域性と言う問題についても、さらに議論を深めなければならない。これらの点については、私にとっての今後の研究課題であり、今回の発表では、以上のような問題の所在を提示するだけに留めたい。

(2) ハドラーミー・ネットワークをめぐる事例研究

さて最後に、インド洋海域世界に張りめぐらされた一つのアラブ・ネットワークの事例として、ハドラーミー・ネットワークをめぐる問題を考えてみたい。現在のハドラーマウト地方は、南アラビアのイエメンの東部に位置し、オマーン国境に近いが、歴史的にはオマーンのズファール地方もハドラーマウトの一部に含まれた。北にはルブッ・ル・ハーリーの大砂漠、南にはアラビア海とインド洋が広がり、イエメンとオマーンの境、アラビア半島の南の外れに位置するという意味において、陸の文明中心からは一番の辺境にあると言えよう。そこは、深く削られたワーディー・ハドラーマウトの溪谷に沿って広がるわずかなオアシス農耕地とその文化・経済の中心都市サイウーン、タリーム、シバーム、インド洋の港のシフル、ムカッラー、ゲイダ、セイフートなどから成り立っている(次頁地図参照)。

ハドラーマウト地方の注目すべき点は、シバーム、タリーム、セイウーンなどの多くの人口を集めた都市が発達し、周囲の厳しい砂漠とは不釣り合いな高層の建築物が立ち並び、学術・文化・教育・信仰の中心地として歴史的に特異な役割を果たしてきたことである。このように極めて自然条件の厳しい辺境に位置するにもかかわらず、ハドラーマウト地方には多くの大都市が生ま



れ、宗教・思想・文化の上で重要な役割を果たしてきたのは何故だろうか。それは他ならず、ハド라마ウト地方がインド洋海域世界に広がるネットワークの重要なノードとして機能し、ハド라마ウトの人々によるハドラーミー・ネットワークがインド洋海域世界に広く張り巡らされていたからである、と考えられる。そこで、ハドラーミーたちのインド洋海域における広範な活動を示す具体的な例を、いくつか挙げてみよう。

ハド라마ウトのタリームの大モスク内で発見されたアラビア語写本の一つで、法学者でありスーフィーの Yūsuf b. 'Abid al-Idrīsī al-Ḥusnī al-Fasī による『マグリブからハド라마ウトまでの旅の点描 (Multaqāṭ al-Riḥla min al-Maghrib ilā Ḥaḍramawt)』が、最近、校訂・出版された。この本は、1559年にモロッコのファース(フェズ)の近郊に生まれた著者 Yūsuf が24才の時、高名なスーフィーたちとの出会いを求めて故郷を離れ、カイロ、メッカ、ジッダ、イエメンを経て、ハド라마ウトに至り、そこで神学の ('ilm al-tawḥid) 教師になり、結婚して定住し、彼の死の直前の70才の時に自分の旅の人生を回想した記録である。彼がハド라마

ウトに来たのは、学者たちとの出会いとスーフィーとしての修行の目的と共に、彼の祖先がアラブ征服の時にマグリブ・アンダルス地方に移住した同じハドラーミー・アラブとしての意識があったからである。さらに興味深いことは、彼の息子の二人、'Ābid と 'Umar がいずれも商売と学術・修行のためにインド、エチオピア、スーダンを訪れた。このように、モロッコ～メッカ～イエメン～ハドラーマウト～インド洋海域世界を結ぶ人と情報のネットワークは、19世紀に至ってイドリース派やサヌースィー派のスーフィー教団が生まれる基礎になったものであり、人のネットワークが西の果てのモロッコから東のインド、東南アジアまで、イスラーム世界を東西に縦断していたことが分かる。

1886年にインドネシアのバタヴィアで出版された Van Den Berg による『ハドラーマウトとインド島嶼部におけるアラブ人コロニー(Le Hadhramout et les colonies arabes dans l'archipel Indian)』では、ハドラーミー・アラブたちが東南アジアの島嶼部、とくにバンダ・アチェ、パレンバン、スラバヤ、そのほかマドゥーラやボルネオ島へ移住したことを実証する調査記録を載せている。また1931年の Van Der Meulen と H. Von Wissmann などのハドラーマウトでの調査によると、ハドラーマウトの港ムッカーのパスポート・オフィスを通じて、東南アジアの各地との間を往来するハドラーミー・アラブ(特に Ba Kathīr)の人数は年間1,000人、シフル経由では400～500人にも達すること、ハドラーマウト地方の内陸のドゥアーン(Wadl Dō'an)とホレーダ(Hureida)の町の大半の人々が商売と出稼ぎのためにエチオピア、インドとジャワに出かけているとの興味深い実態を報告している。

では、ハドラーミーたちは、いつ頃から、いかなる動機のもとに、どのような過程を経てインド洋海域世界に彼らのネットワークを拡大していったのか、また彼らのネットワークの実態は何か、彼ら移動する人間にとって地域観、地域性とは何か、彼らの移動のネットワークが他のアラブ系、イラン系やインド系、中国華僑系のネットワークとどのように違うのか、相互にどのように関わっていたのか、などの多様な問題がある。しかし、こうした問題の多くは、いずれも具体的な記録史料に基づいて分析・解明することが困難であり、私にとっての今後の研究課題である。ここでは、アラビア語による年代記、名士伝、聖者伝、リフラ書などに散見する断片的な記録に基づいて、以上の問題に関わる諸点について、概略的に紹介するに留めたい。

●インド洋海域世界におけるハドラーマウトの位置：先に述べたように、ハドラーマウトはいずれの場所からも遠い陸の孤島にあるが、インド洋航海の要地(ペルシャ湾～東アフリカ、紅海～インド、ソコトラ島)に位置している。また、そこはインド洋海域の各地から集まるムスリムたちのメッカ巡礼ルートの交通ネットワークの拠点、メッカ、イエメンに至る途中のイスラ

ム諸学の学術センターでもあった。そこは、特産品としての乳香、没薬、龍涎香などがあり、その他に東アフリカ、ソコトラ島との中継貿易として多様な物産を集める上でも重要な位置にあった。そして、シフル、ズファール、ムカッラーなどのハド라마ウトの主要港は、中東の領域国家の支配を受けないコスモポリタンな自由港として発達し、ハドラー商人、船乗りの活躍がインド洋海域で古くから見られた。

●郷土意識と聖家族の役割：ハドラーたちは、伝説上の部族、預言者に由来する血縁集団や聖家族を指導者とした強い共同体的な連帯意識を持って結ばれていた。アール(クラン、血縁集団、大家族)の指導者は、サイイド(sayyid)、またはマシャーフ(mashā'ikh)と呼ばれて、集団全体に対するカリスマ的リーダー権をもち、同時に先祖から受け継がれてきた聖域(ḥawṭa)、聖墓(maqbura/maqbara)や参拝地(mazār)を守る長でもあった。そうした場所は、アールの集団構成員たちにとっての協議・契約・紛争解決の集まりの場所であり、末期の地でもあった。聖域や墓に帰属意識を持つことは、彼らが移動の生涯を送り、死の時に墓に戻るという地域観、人生観と深く関わっていた。14/15世紀になると、アールの指導者がイスラム諸学に精通するウラマーとして、またスーフィー・タリーカの長、偉大なる聖者としての強い権威を持つようになった。

●Ba Saqqāf を起源とする分家、とくにアイダルース(Bā 'Aydarūs)のインド洋海域への活動：アイダルースィーヤ(クブラウィーヤの一分派)と呼ばれるスーフィー・タリーカの活動により、彼らの移動に新しい展開が16/17世紀にあった。アイダルースィーヤは、19世紀に至って成立するイドリース派タリーカやサヌースィー派にも強い影響を与えたと思われるが、カーディリーヤ派スーフィズムと同じく、都市派のスーフィー・タリーカであり、キヤース(類推)、イジマーを認めずに、コーランとハディースを尊重する点で、スンナ派のウラマーや政治権力と結び付き易かった。しかし一方では、アイダルースの祖先に至る聖家族の意識が強く、ズィクル、護符や呪文、占いなどを用いる点で神秘主義の一潮流であると言える。このタリーカは、インドのグジャラート地方のアフマダーバード、ゴルコンダ、グルバルジャや東南アジアの諸都市へ強い影響を及ぼしたことで注目される。そして、このアイダルースィーヤのスーフィー・タリーカがハドラーたちの商売と移動・移住の経路を大きく決定した。

●教育制度と学問の旅、情報交流：彼らは、正統イスラム諸学(コーラン学、ハディース学、タフスィール学、法学、アラビア語学、詩文)と実学教育(計算学、星占学、医学、土木技術)を重視した。従って、移住先において彼らは主に書記、侍医、軍人、占い師、技師、通信士、高級船員、教師、仲介斡旋業、銀行、ホテル、運輸、出版業などに活躍した。彼らの間では、

高級ウラマー教育のための学術サークルが発達し、ウラマーたちはイエメン、メッカ、東アフリカ、インドなどのインド洋海域世界を広く遍歴することで、学問を修得し、また彼らの主張や情報を広める上で大きな役割を果たした。彼らが活発な出版活動を展開したことも注目される。とくにシンガポールにおけるイスラーム法学書の出版が代表例であり、その出版物はインド洋海域世界で広く使われた。

●ハドラーミーの移動時期と経路：ハドラーミーたちの移動は、15世紀半ばに始まり、特に17・18世紀に目覚ましい拡大をした。彼らがインド洋海域に進出するようになった発端は、イエメン・ラスール朝勢力の崩壊とオスマン・トルコの中東拡大によるイスラーム世界のネットワーク構造の変化と関連している。彼らは、最初は東アフリカのスワヒリ都市、インド亜大陸のヴィジャヤーナガル王国との境域地帯、特にゴルコンダ、ビージャープール王国に進出し、17世紀半ば以後には東南アジアに進出した。バンダ・アチェは、東南アジアにおけるイスラーム化運動の基地であり、彼らのジャワ世界への拡大の窓口となった。

●多様なネットワークとの競合による膨張のダイナミズム：16～18世紀と言う時代は、ヨーロッパ勢力のインド洋海域世界への拡大の時期であり、同時にイラン・イラク、ペルシャ湾経由、またグジャラート経由によるスーフィー・タリーカの活動(カーディリーヤ、チェシュティーヤ、ナクシュバンディーヤなど)の多様なタリーカ・ネットワークの拡大時期でもあった。さらにはアルメニア系商人、ユダヤ系商人やインドのチェテアル(Chettiar)商人などの専門化した商業・運輸集団がインド洋の海運ネットワークを利用して活躍した。東では、華僑系ネットワークが拡大していった時期でもある。この時期のインド洋海域世界は、多様なネットワークの競合による膨張のダイナミズムを持った時期であったと捉えられる。この点で、A. リードやエ. ウォーラステインの見解は、再検討されなければならないと、私は考えている。

以上をまとめるならば、①集団の同種・同族性(homogeneity)という意味では、ハドラーミー・ネットワークは、宗教・教団・出身地(同郷)、兄弟血縁関係により堅く結ばれていた、②専門化した学問・技術・情報、③インド洋の交易ネットワークの活用(モンスーン航海による定期海運、広域市場体系、流通システム、国際交易と地域交易の関わり)、④ヨーロッパ世界システムの拡大と伝統的インド洋ネットワークというインド洋海域世界の二重構造が形成されるなかで、彼らはその狭間に巧みに生き続けた、⑤正統イスラームを表看板としたこと、とくにコーラン、ハディース、伝統イスラーム学を尊重する、縦型イスラーム・ネットワークにより、多様なイスラーム世界(地域イスラーム)が形成されていくなかで、インド洋海域世界のイスラーム系国家及び都市ウラマーたち(学者・教養人たち)に積極的に受け容れられ、19世紀

以後にはヨーロッパ勢力に対抗する一つの精神的支えともなったこと、などの諸事実が指摘されよう。

おわりに

以上、私は今までの議論によって、岩石結晶のような化石化した「地域」を見るのではなく、伸び縮みする地域、重層・複合の地域、人の移動、社会・文化現象のなかにトレースされる地域、歴史のなかにダイナミックに揺れ動く地域、未来型地域としてのネットワークのノード等々の、ソフトな地域像を考えなければならないのではないか、という提案を試みた。この点で、今回の「中東と東南アジアの地域間研究」の会を機会に、皆様の間で議論を深めていただきたいと望んでいる。

コメント I

応 地 利 明

家島さんがレジュメの一枚目で、「器が先か、中身が先か」、あるいは「地域が先か、人が先か」という問題のたて方をしておられる。ここから私が連想したのは、20世紀のはじめにあった、社会学者デュルケイムと『人文地理学原理』の著者であるポール・ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュとの議論である。ヴィダルは、地域——彼の言葉では「場所」——のもつ規定性を主張している。それに対して、デュルケイムのほうは、いわば組織を中心にして議論を進めようとした。この議論は結果的には、お互いが言い放しという感じで、いわば引き分けであった。この問題に対し家島さんは、論理的に、かつ歴史的事実に基づき、一つの明確な立場を示した。

今日の話では、いくつかの問題が提起されていると思う。家島さんの著書に『海が創る文明』というのがあるが、今日の発表は、むしろ「都市が創る文明」が主題であっただろう。我々は、南アジア、東南アジア、日本などいずれの事例においても、村から都市へというひとつの発展図式を想定して考える。この考え方をくつがえして、はじめに都市ありきとした。家島さんが言う原都市、あるいはメタ都市ともいえるだろうが、それはその場所に存在しうべくして存在していると主張した。その基盤としてネットワークがあるということになろう。こ

のことは、午前中に古川さんが言っていた中東は人工空間としての都市で形成されているという、中東の歴史的な展開過程そのものを示しているのではないかと思う。

さて、ここから一つの問題として、イスラームとプレイスラームとの間の関係をどう考えるかということが出てくる。人類史における都市文明発生地である中東には都市が創る文明という伝統があり、その伝統のうえに都市が出来あがっているとすれば、この伝統とイスラームの都市像との関係についてもう少し詳しくお聞きしたい。

次に「地域」についてであるが、先にも言ったが、家島さんは、器が先か中身が先かということではすでに明確な答えを出している。すなわち、都市間ネットワークが先行して存在し、その中に地域が作られる。だからネットワークそのものが一つの機能的なノードとしてあり、それが結ばれていくのである。グラフ理論で例えていうならば、ノードからパスが伸びていき、そのパスの末端に村があるといった形で地域が出来ていくのである。我々はこれを機能地域の形成と呼んでいるが、こうした機能地域の形成という考え方で地域は理解できるということを家島さんは明確に言っている。

そうすると、器、あるいは古川さんの話に出たような、生態的ニッチェという言葉で表わされる生態環境的な、または空間的なまとまりというものが、いま述べたような機能主義的な考え方の中で、ネットワークを基盤とした地域の形成とどのように関連しているのか。そういったニッチェというようなものが、地域形成の外枠として、前提的な与件としてあるのだ、と私は考えているのだが、この点についてもう少し説明していただきたい。

ネットワーク、あるいは原都市から都市が形成される社会というのは極めて流動的であるということを指摘したい。私は、30年ぐらい前にイランやアフガニスタンの村に短期間であるが滞在した。そのとき、日本の村との違いを強烈に感じた。それは、人の流動性が非常に高いということである。例えば、日本の村の場合には、家号があって、それによってその家の系譜が分かるというように、世代累積的に存在している。私は、村というものは、このように世代継承性を持ちながら、機能的に累積していくものだと考えていた。ところが、中東の村で聞いてみると、家々はごく短時間に形成されたという。また、二年後ぐらい後に再訪した時には、二年前には居た誰々はもういないといったことになっている。非常に流動性が高いのである。この点について、吉田光邦さんが初期の『東南アジア研究』に、結果的にみるとステップ世界と熱帯多雨林世界というのは非常に似ているのである、と書いている。ジープに乗って、イランを走っている時と、マレー半島あたりの降雨林を走っている時とで同じ印象を受けたのだという。窓から見えるのは、片や岩山だけ、片や緑だけであるが、まず基本的に人がいない。そし

て、水が無い世界と水が多い世界であると。おもしろいのは、その様子をスポンジに例えていることである。砂漠は、カラカラに乾いたスポンジであり、東南アジアのほうは水をたっぷり含んだ状態のそれである。そして、適度な水分量にしようとする際に、どちらが困難であるかという、それは当然、たっぷり水を含んでいるスポンジのほうである。指でおして水を出しても、すぐに再び吸収される。常に水の飽和状態なのである。一方、カラカラのスポンジのほうには、少しずつ水を加えていけば、適度な水分量になる。こういったことを書いている。

私のイランやアフガニスタンでの経験でも、水は、大量でなければ意外に容易にひくことが出来るのだと思った。先の話に戻ると、村の人口の流動性が高いということは、どこかに新しい村が拓かれているということである。結局、小作契約の条件を天秤にかけて、簡単に移動していく社会なのであろう。いま言ったような適度な水量のある場所をつくりあげて、そこに農耕地を拓いていくのである。そうしたことは、我々湿潤地帯に住む人間が考えるよりも容易なのではないだろうか。

ここで生態的ニッチとか、乾燥とかいった条件を考えることが出来る。家島さんが言ったような、ネットワークにおいて常に現われる人のフローといったものを生み出す余地というものがある形で——様々な形というのは環境的な条件も含むのであるが——存在しているのではないだろうか。

最後に、話に出た海域世界について質問したい。イスラーム以前からインド洋の海域世界というのはあった。例えば『エリュトラー海案内記』だとか、タミルの古代叙事詩などにそれは表わされている。インド洋で結ばれた海域世界というのは、古い時期からあって、バスコ・ダ・ガマがそれを使ってインドに来たように、イスラームもそれに乗かったのだと言える。そうすると、海域世界におけるネットワークの形成のされ方が、イスラームの登場によってどこが、どのように変化したのか。すなわち、海域世界というのは本質的にネットワーク型の社会であって、それにイスラームの持つネットワーク社会的特徴が相乗的にかさなって、大きなイスラーム社会としての海域世界が出来上がったということは理解できるが、そこでの二つの世界、イスラームと海域世界との関係について聞きたい。具体的に言えば、何がイスラームの出現によって変わり、あるいはまた増幅されたのかということである。そうした話から、イスラーム社会、または文明が創る世界としての中東という地域が浮かび上がってくるのではないと思う。

コメント II

高橋 美紀

華人のネットワークの視点から、家島先生のご発表との関連でお話申し上げたい。東南アジアの華僑・華人ネットワークは、国境を越えた華僑・華人の動きであり、これからもそうした動きは続いていくであろうと考えられる。

華僑・華人の場合は、宗教が一つのつながりになって動いているわけではない。また、国境を越えた動きをもつ一方で、それぞれの居留国にチャイナタウンという非常に特殊な世界を作っている。家島先生は、イスラームについて「開かれた世界」とおっしゃられたが、それに比べると、華僑・華人は、各居留国の中で非常に「閉じられた世界」を形成しながら、他方、シンガポールのように、自分達の国家を作り上げたり、東南アジアや北米等の地域間では、経済ネットワークを通して国境を越えた独自のつながりをもっている。

まず最初に、東南アジアにおける華僑・華人について概要をお話し、次いでかれらの経済ネットワークについて述べる。そして、その経済ネットワークを支える「文化のネットワーク」の一例として、華僑・華人が共通にもつ華語(マンダリン)のネットワークが今日広がっているということについてお話ししたい。

東南アジアへの中国人の移住が本格化したのは、18世紀後半のことである。それはイギリスが植民地支配を進めていく中で、その労働力、クーリーとして流出したことがきっかけとされる。この頃の中国人労働者の移動は、猪子(チョシ)貿易と呼ばれ、中国人は、生き地獄のような状態で、豚の子のように船で運ばれた。19世紀中期からは、それが世界に拡大した。こうして世界各地域に流出した中国人の人口は、19世紀後半で300万人ほどであったのが、20世紀の初めには倍以上の760万人に膨れあがり、1931年の統計によれば、1,283万という記録が残されている。

こうした在外中国人が自らを華僑と称し、他の人々からもそう呼ばれるようになったのは、19世紀末から20世紀の頃と言われている。日本では華僑という呼び名が最も馴染み深いですが、ここでは中華民族の特徴を持つ人々で、中国籍のまま他の国に居住している人を「華僑」、居住する他の国の国籍を取得している人を「華人」と呼ぶことにする。その他、国籍を問わずに中華民族の特徴を持っている人々を総称する「華族」という語もあるが、これはあまり使われない。また、中華民族の特徴を持っていながら、5世代以上の世代を重ねており、中国との結びつきがなくなってしまう人々を指して「華裔」と呼ぶ場合もあるが、これも使う人に

よって定義は様々である。

華僑・華人および香港、マカオ、台湾の中国系の人々、そして中国に住む中華民族すべてを合わせると、12億6～8千万人になると言われている。このうち華僑・華人の人口は、中国側の発表によると、2,726万となっている。しかし、統計のとりかたは様々で、最も多い例では5千万という統計もある。そしてこうした華僑・華人の86%が東南アジアに集中している。

華僑・華人社会の特徴のひとつは人的な結び付きにある。よく知られているのは、血縁、地縁、業縁である。血縁とは、同族、つまり同じ姓を持つ人々のつながりで、地縁は同じ言葉、方言を話す人々のつながり、業縁は、同じ業種に就いている人々のつながりである。その他に、祖先崇拝に基づくつながりや、風俗・習慣を共にすることで形成されるつながりなどもある。

華僑・華人を特徴付けるもう一つの側面は、中国、台湾との関係である。在外中国人は、中国、台湾と政治的に微妙な関係にあり、僑民として対外政策の対象になっている。特に今日では、両国・地域ともに在外華僑・華人の経済力を非常に重視しており、彼らとのつながりを求めている。中国も台湾も二重国籍の廃止を掲げており、在外華僑・華人は居住国の発展に貢献せよと主張する一方で、僑務弁公室などの政府機関を設け、僑民対策に熱心に取り組んでいるのが実情である。

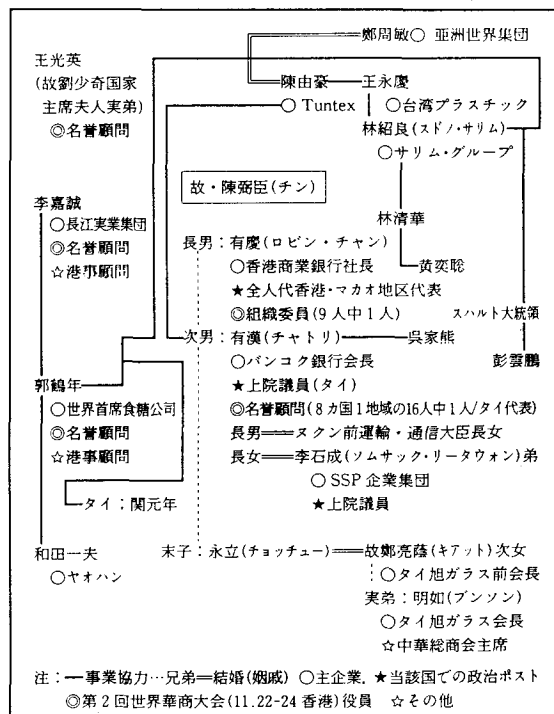
次に、華僑・華人の経済ネットワークについて述べる。最近では華僑・華人社会の経済活動が注目を集めている。中国人の家族経営の例にみられるように、組織よりも個人の能力と才覚を重視するネットワークを持っている、ということが華僑・華人の経済ネットワークの特徴としてよく指摘されるが、そこでは個人が絶対的な権力をもっている。ただ、こうした経営方針には問題点もあり、例えば、最初の経営者がネットワークの中心である時は良いのだが、その人が代議りをする際に後継者問題が生じるという例もある。

華僑・華人社会のビジネスのもう一つの特徴として、リスク回避を挙げることができる。これは、ネットワークの形成に大きく関係している。東南アジアでは、華僑・華人の経営者が居住国の政治権力者と密接に結び付きながら事業を展開しているといわれ、例えばインドネシアの華僑・華人が、スハルト大統領と結び付いて作り上げたサリム・グループは有名な例である。華僑・華人は、表面的には自分達のビジネスは政治とは一切無縁であると主張しており、それゆえ、かれらが行なう中国への経済投資を中国政府も受け入れているのであるが、実はその裏には非常にしたたかな手腕があって、巧みに政治的リスクを回避している。そして、そのための一つの方策として、ネットワークを形成しているという側面が強いと思われる。

こうしたネットワークの例として、樋泉克夫先生が調査されたバンコク銀行の創設者である

故チン・ソポンパーニット(陳弼臣)が築いたネットワークの例がある(資料1参照)。それを見ると、彼がいかに自分の親族関係と事業協力関係を通じて、フィリピン、インドネシア、マレーシアなどにネットワークを広げていったのかがわかる。今では長男と次男に代替わりしているが、そのうち次男はTuntexグループ会長の陳由豪という台湾華僑の経営者と事業協力をしており、その陳は、台湾プラスチックの王永慶社長と結びつきをもち、そこからインドネシアのスドノサリム・グループにつながっていく。このように華僑・華人は人脈を通じ、微妙な人間関係を保ちながら事業を展開している。チン・ソポンパーニット自身も生前、香港を中心にして東南アジアの主な華僑有力者を集め、政治討議を含めた非公式の会合を持っていたといわれ、同会合を通じて、スドノサリム・グループをはじめ、フィリピン、香港、マレーシアの華僑有力者、事業家とも繋がりがあったといわれる。さらに業縁の他、チン・ソポンパーニットは潮州系であることから、その地縁、血縁のつながりを利用して香港の中国系財界人、政界人のなかに入り込んだといわれている。

資料1 タイのソポンパーニット=陳一族を例とする華僑・華人脈



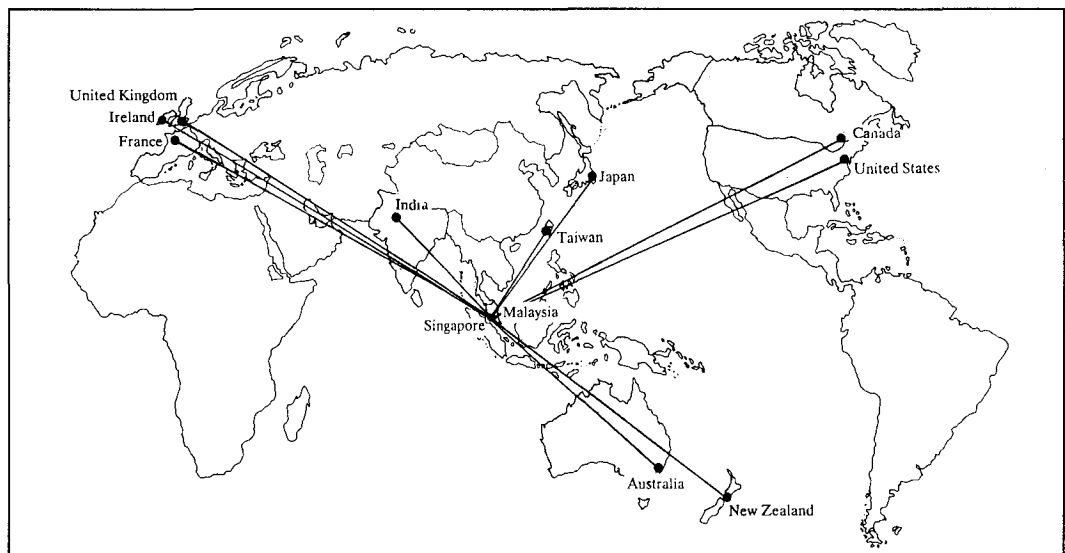
(出典) 梶泉克夫『華僑の挑戦—金と血の団結が世界を制す—』
 ジャパンタイムズ、1994年12月、189頁

また世界華商大会も華僑・華人のネットワークの一例である。そこには、国境を越えた中国系の人々の経済活動の動きが示されている。世界華商大会の第一回会合は、1991年にシンガポールで開催され、第二回は1993年に香港で開催された。この大会の主な関係者をみると、東南アジアのみならず北米等も含めた、まさに世界の華僑・華人が集ってネットワークを形成している状況をうかがうことができる。この世界華商大会は、もともとシンガポールのリー・クワンユーの呼び掛けで始められた。リーによれば、その目的の一つは、全世界の華人が総力を結集して中国の経済建設に協力することであるという。ただそこでも、リスク回避の原則は忘れられておらず、中国との過度の接近は、居留国における反共主義を呼び起こすことになるため、それは避け

ねばならないとされている。現在は、シンガポールの呼び掛けで、特にビジネス分野での情報交流を目的としたコンピューターネット計画が進められているといわれる。これは、華僑・華人の経済人を、地域に関わりなくインプットして、いつでも情報を得られるようにするための計画であり、情報がネットワークを作っていく一つの例である。

そこで、このような経済ネットワークを支えている華語文化ネットワークの話に移りたい。華語とは、華僑・華人の間ではマンダリン、大陸では「普通話」、台湾では「国語」と呼ばれている言語であり、ネットワークを支える情報伝達の媒体と考えられる。たとえば、80年代末から90年代にかけて、華僑・華人向けの雑誌『亞州週刊』が香港で発行されたり、東南アジア全域に向けて華語での衛星放送が流されるようになったのも、華僑・華人の国境を越えた動きのあらわれといえる。

資料2 マレーシアの華人学生の主な留学先（私立華語中等学校卒業生の場合）



(出典)Higher Education Advisory Board, Merdeka University Berhad ed.,
'The Malaysian Independent Chinese Secondary Schools System and Unified Examination Certificate', United Chinese School Committees' Association of Malaysia, n. d., P.12

先に家島先生がハドラーネットワークについて述べられた際に、どうして人々が移動するようになったのかという理由として、地理的に辺境であることや、その他の様々な要因ゆえに、人々は外に出ていかざるをえなかった、ということをおっしゃられた。華僑・華人の場合も同じであり、初期にかれらが国を出ていったのは、食べる物もないような貧しい状況におかれて

いたことが挙げられる。今日の東南アジアなどの華僑・華人の場合は、必ずしもそうした状況にあるわけではなく、居留国における政治・経済的な状況のゆえに、国境を越えたネットワークを自ら広げようとしている。

その一つの例として、教育を通したネットワークがある。家島先生も、ハドラミーネットワークにおいて教育が非常に重視されているということをおっしゃられた。東南アジアの華僑・華人についても同様の傾向が指摘できる。国ごとに事情は異なるが、ここではマレーシアを例にとって、華人の留学について話したい。マレー系の優先政策であるブミプトラ政策が開始されると、ブミプトラであるマレー系や東マレーシアの先住民族の学生に高等教育を受ける機会が積極的に与えられるようになった。そうした状況が、70年代から現在まで続いている。そのため、それ以前は、華僑・華人は高等教育就学者の中で大きな位置を占めていたのが、この20年余りの間に様変わりしてしまった。

華僑・華人は教育を非常に重視するといわれるが、マレーシアの場合、進学先を失ったかれらは、海外に向けて人材を送り出すようになった。マレーシアの華僑・華人は、現在、自分達独自で運営する私立の華語中等教育機関「華文独立中学」を有している。この「独中」の卒業生の進学先として、「独立大学」という大学の設立を計画していたが、政府の反対から実現には至らなかった。またかつてシンガポールには「南洋大学」という華僑・華人が自ら設立した大学があったが、同大学はシンガポール政府の政策によって、国立シンガポール大学に統合され、閉校になった。そのためマレーシアでは、華僑・華人の教育機会が大幅に制限され、華僑・華人の留学志向に弾みがついた。こうして教育ネットワークが、徐々に張りめぐらされつつあるというのが現在の状況であると考えられる(資料2参照)。

華僑・華人学生の進学先についてみると、彼等は、アメリカ、イギリスなどの英語圏の国を中心に様々な国に留学している。その数はマレーシアからの全留学生数の6割近くにもなる。そうした状況は、頭脳流出といったことにもつながり、今日大きな問題になりつつあるが、一方では留学と、その際の文化交流を通して、華僑・華人のネットワークが広がっているのではないかとも思われる。そしてこうして作られる文化ネットワークが、華僑・華人の経済ネットワークを支えていることが考えられる。

以上述べたように、華僑・華人ネットワークは今日様々な広がりを見せている。こうした動きの背景には、中国が70年代後半以降、改革開放政策を進めるようになったことに応じて、華僑・華人社会が人的交流を拡大させたことも指摘できる。それらは、従来から華僑・華人が大きな影響力を持っていた東南アジアの国々のみならず、香港、台湾、そして今日注目されてい

る、インドシナ半島、ミャンマーなどでもみることができる。こうした人的交流では経済関係が重視されているが、先に触れた華語との関連でいうと、近年顕著になった動きとしてビジネス用語としての華語見直しの動きも活発化している。インドネシアやカンボジアなどでも華語学校が復活しつつあると聞く。

最後に、こうした華僑・華人のネットワークの拡大をみるうえで、今後注目すべきであると思われる点を2点挙げたい。第1点は、中国、台湾、東南アジアを結ぶネットワーク拠点としての香港の位置付けである。香港は、経済人が対中国投資を積極的に行なう場として台湾やアセアンからの対中国投資の窓口にもなっている。逆に中国の方も、香港を一つの足場として東南アジア等の華僑・華人ネットワークとつながりを持とうとしている。香港の経済界が持っている人脈は、台湾、東南アジア、中国はもとより、欧米にまで広がっていると言われている。こうした状況が97年に予定されているイギリスから中国への返還以降、どのように変わっていくのかは興味深い点である。

また第2点めとしては、今日再び盛んになりつつあるといわれる新華僑の流出があげられる。新華僑というのは、中国の改革開放政策によって引き起こされた人口移動によって出現した。当初は、経済難民とか、偽装難民とかいった用語で呼ばれていたのが、現在では新華僑という用語で呼ばれるようになっていく。例えば、1979年から現在まで、アメリカだけで、そうした人々が約50万人流入したと言われている。他にも、日本やオーストラリア、さらにはソ連の崩壊後、シベリア鉄道でモスクワを経由してヨーロッパにも流入している。

以上、国民国家の枠を越えて広がっていく華僑・華人ネットワークについてお話し申しあげた。華僑については古くから「海水の至る所に華僑あり」と言われるが、このことは現在の華僑・華人にもあてはまる。華僑・華人は、三つの刀、すなわち床屋のハサミと料理の包丁、仕立屋のハサミの三つがあればどこでも生きていける、たくましい民族であるといわれる。しかし、一方で、行った先の国や地域にすぐ同化してしまうのかということ、必ずしもそうではない。チャイナタウンの例にみられるように、移り住んだ先の国でも自分達の文化をかたくなに維持している。その意味では、非常に「閉じられた世界」を外で形成しているのである。家島先生のお言葉を借りていえば、その「閉じられた世界」を一つのノードとして、他のノードとつながる道筋をネットワークを通じて作っていると言えるのではないだろうか。今日の東南アジアの華僑・華人の状況をみると、かつては「落葉帰根」といわれ、舞い落ちた葉もいずれは中国の故郷に帰るといわれていたのが、今では「落地生根」で、落ちた場所に根を生やし、その場所で強く生きていくようになっているといわれる。マレーシアの例でも、4世、5世になると、

自分達は中国系のマレーシア国民であると主張しているし、多くの生徒が国語であるマレー語を主要教授用語とする国民学校で教育を受けている関係で、マレー語や英語はわかっても華語は十分には判らない華人学生も多い。そうした中でも引き続き、他民族とは同化・融合することなく、自分達の伝統文化を大切にし、そこでの結びつきをネットワークとして生かしていると考えられる。

質疑応答

ネットワーク・生態・インド洋

鈴木 まず家島さんのほうから、応地さんと高橋さんのコメントに対して答えていただき、それをきっかけとして討論に入りたい。

家島 応地さんの御指摘は、いずれも非常に重要であり、今後の私の研究課題でもある。しかしイスラームになって何がどう変わったのかという問題は、様々な意味を持っているので、簡単に説明することは難しい。

とりあえず、応地さんがおっしゃった三点について、私の考えを述べる。

まず、私は出会いの場としての交点、ノードの持つ原理と性格について考えてみたかったのである。この点で、イスラーム以前と以後では、原都市としての都市機能はどのように違うのかというのが、最初の質問の主旨であろう。私は、中東というのは、基本的にイスラーム以前と以後も同様に、ネットワーク社会であったという意味で、連続性があると考えている。5～7世紀において、中東は地中海世界とインド洋世界が繋がってその中間に位置しており、交流上の接点として非常に重要な意味を持っていた。そして、その状況

をうまく捉えてイスラーム世界が出来上がった。まさに、原都市的機能が最大限に機能して、その都市ネットワークの上にイスラームが乗ったという時代性を考える必要があろう。メソドロジカルにノードを分析するために原都市を考えたのであり、その点では時代的に中東都市は連続したものと考えている。

二番目の問題の前に、まず三番目の問題について述べる。ネットワークを考える際には、双方向性、拡がり、量、ヒエラルキー(質)などが重要な要素であることは、既に触れた。そういうネットワークの要素をもとに、ネットワークが絡まって濃淡をもつ地域空間が形成される。今度はその空間について、生態系その他の条件がどうなっているのかを分析する。つまり、器を先にみだててそこに人間を乗せるのか、あるいは人間を先に見て、そこにトレースされた空間の在り方を分析していくのかという立場の差異であって、私は後者の立場を取りたい。確かに生態的な特徴がどのようにその空間を覆っているかをみることは重要である。海域というのは、そういう意味で、共通の一つの関連性の中で現われる世

界である。それから、砂漠とステップという共通の自然生態系の広がる世界がある。たとえば、ニジェール川流域、チャド湖から東にエジプト、スーダンにかけての、いわゆるスーダン・サーヘルベルト。これはサハラ砂漠と南部の森林地帯との間にステップが東西に広がっている。ここにはやはり、共通のエコロジーをもった世界と共通の生業形態の持った人間の生活圏と交通のルートが出来上がる。そして同時に縦の交通ルートとのノードの接点となるオアシス都市が出来る。そういう面では、スーダン・サーヘルベルトは自然生態的に共通の地域性を持った空間といえる。しかし私の立場では、人間の移動、あるいはネットワークの中にトレースされた共通の空間が何であるかということを第一に考えたい。そして自然生態、人間の移動、そこに流れている文化的な特徴、という三つの要素のもとに、地域の構成をもう一度考えるという立場である。

インド洋海域世界についても同じだ。ローマ帝国の時代、すなわち紀元前後から1、2世紀にかけての時代に、地中海世界は東に向かって大きく膨張した。その世界にローマ帝国が覆いかぶさる。そして、インド洋の、特にアラビア海とインド西海岸までが地中海世界につながるネットワークに組み込まれていく。『エリュトゥラー海案内記』は、まさにその世界を描いている。つまり、中東を中軸と考えると、アラビア海と、インド洋西海域

とは中東と地中海世界に跨る共通性の世界である。その世界がイスラームの時代になってから、ダウ船の技術的発達があり、交易ネットワークとそのノードのさらなる拡大が起こる。そして、7世紀末から8世紀半ばには、ベンガル湾から南シナ海までそのネットワークは広がっていく。さらに、アッバース朝時代に、内陸のイスラーム都市、つまりノードが新しい展開を遂げる。それ以前の時代には、地中海世界との関わりの中だけで存在していた。このように私は考えている。

原都市

鈴木 場の特質といったものが、イスラーム以前と以後では連続しているのかいないのかということが応地さんの質問のポイントだろう。今の話からいうと、かなり連続性もある。**家島** 連続性と同時に、やはり、時代の流れというものをイスラームはうまく捉えたと言える。古代からの人間の経済的・文化的な変質・変化の順序・段階を捉えて、中世にイスラーム世界が形成された。具体的に言うと、ビザンツ帝国とササン朝ペルシア帝国という、中東では大きな文明世界があり、その両者の政治的・経済的な世界が、いままであった地中海世界・インド洋世界と繋がって、その中に共通するイスラーム世界が出てきたのだと思う。

応地 社会的練度という問題に関連すると思うがどうか。

古川 農業に先行する場として原都市を考えることには全く賛成である。ルートがあってそれが交差するところに何か出来る。以前、高谷さん達とオアシス農耕について考えた時、そういったことをまさに考えていた。とは言え、その当時はこう考えていた。つまり、人々は移動していて広い地域間の交流があって、その交流の線で止まらねばならないことがある。そこに茶店が出来る。お茶を沸かすために水をひかなければならない。まだこの時点では農業はない。茶店が先に出来てオアシス都市のもとになる。そして「余り水」を利用するような形でオアシス農耕が発生する、というように考えていた。

家島 私も原都市の成立過程を、そのように考えたのである。ナイルの農業にしても、都市と結びついて非常に商業的であるといえる。9、10世紀に綿花や砂糖キビなどの商品作物の栽培が起り、わずか一世紀の間にペルシヤ湾岸の地域からシリア、エジプト、北アフリカ、そしてアンダルスの先まで広がる。これは、まさに商業としての農業であると言える。

古川 その点に関しては、賛成なのであるが、原都市というのが、無の場所、からっぽの場所に出来るという点が納得いかない。というのは、結局オアシス都市が出来るところは、もちろん砂漠の中であるという意味で無であるが、それが出来た後には、そこには、泥壁の家が並び、祭壇や広場のようなものも出来る。そうすると、無の場所ではなくなる。さ

らに、出来る前であっても、それが出来る場所は、自然の川から近いところ、水をひきやすいところであろう。するとやはり、器が存在しているのではないか。結局生態と人の動きは関係しているのでは。

家島 それ以外の場所にも都市は出来る。農業生産もなく、水もないところに点としての都市や港ができる。シーラーフというイランのペルシヤ湾岸の町などが好例である。ノード、都市は人間が人工的に作るのである。カナートにしても、山岳部から砂漠を越えて何十キロもひいてくる。そして砂漠中に都市が作られる。つまり、メタ(原都市)を考えて、その基本的な性格なり構造なりを分析の一つのベースにすることが重要である。そして、時代性、人間性、あるいは社会的経済的な条件といったものがその上に重なってくる。

郷土意識

応地 先に華僑のお話があった。華僑という私達はすぐに、幫(パン)といった地縁的な紐帯をもとにしたネットワークを考える。家島さんはハドラーミ・ネットワークのお話で、郷土意識とおっしゃった。それは、例えば華僑の場合での福建出身者が集まるというような意識と同じなのか。

家島 ハドラーマウトの出身者(ハドラーミ)の場合は、「ワーディーの民」という言い方がある。かれらは丁度、グランドキャニオンのようなワーディー・ハドラーマウトの谷に

沿って住み、サイドと呼ばれる神聖な力を持った家系の人が共同体をまとめる権力を持った。従って、ワーディーの民という言い方と都市のそれを囲むサイドの結び付きというものが二重になっている。

片倉 ハドラーミーは例外であるのか。

家島 血縁、地縁の意識、サイドを中心とする共同体的連帯の強固さの点では、特に例外と思われる。

片倉 郷土意識というのは、「故郷は遠くにありて思うもの」というように、だれもが何らかの形で持つのではないか。

家島 例えば、マグリビーというように、マグレブの人たちの意識というのがある。これは東方イスラームの人(マシュリク)に対応する言葉である。

片倉 問題なのは、それを持っていることによって、ハドラーミーの人々は最後は、元の場所に帰るのかどうかということである。

家島 原理的には帰る。特にサイドは。基本的には、帰るべきという意識がある。しかし、現実には必ずしも帰らないし、時代が下があれば移住先にコミュニティを作り、混血することもある。

片倉 意識のレベルと、実際にはどうかというレベルがある。また、先に高橋さんがおっしゃったように、華僑は同化しない。チャイナタウンを作っていく。そうした形態とはかなり違うだろう。

立本 アラブ人は同化するのか。マレー人の

ほうがアラブ化というか、真似をすることがある。その同化ということがはっきりしない。

片倉 チャイナタウンのようにムスリムタウンがあるわけではない。

立本 ただシクォーターはある。アラビック・クォーターのような。数の問題である。チャイナ・クォーターと同じレベルでアラビック・クォーターがある。アラブのほうは、大きな町になっていないだけである。

片倉 それはどこにあるのか。

立本 シンガポールにある。田舎でもアッチェ、スラウェシなどでみられる。

小杉 そこでは何をしているのか。つまり、チャイナタウンの場合は、中国語の新聞を出したり、中国的なことをしている。そういう意味での、アラブ・アイデンティティを保つようなことをしているのか。

鈴木 シンガポールの場合、パレンバン経由で移って来たアラブ人の家族がいるが、かれらはマドラサを作っており、コーラン学校を開いている。外婚は少ないようである。様々であるが、私が訪れたムスリムの知的指導者の家は、原則としてアラブだけで結婚していた。

故郷意識の問題で、ハドラーミウトの場合は故郷意識はあるが、帰ろうと思っても帰れなくなるようなことがある。華僑・華人の専門家から、ハドラーミウトとの比較でこの点についてうかがいたい。

高橋 私の見た限りでは、世代間で差がある。

一世の世代は方言しか話さない。広東出身であれば広東語しか話さない。ところが、三世、四世、五世の世代になると居住国の国籍をとっている。彼らは、自分達の祖先が、例えば広東出身であるという場合、いつかはその祖先の土地を訪ねてみたいと言ったりするが、一世の世代と同じような故郷意識を持っているのかという疑問である。ただし、これも、族によってずいぶん違っている。例えばよく知られているように客家は、非常に結束が強く、華僑・華人の中のユダヤ人ともいわれている。東南アジアで活躍している政治家や経済人には、客家出身が多い。彼らの活動の背後には、同郷意識に根ざして張りめぐらされたネットワークがある。

片倉 大まかに言うと、郷土意識の強いものは華僑、そうでないものは華人になっていく、と考えてよいのか。

高橋 華人を居住国の国籍を取ったものと定義する場合、華人の方が華僑に比べ郷土意識は弱いと考えられる。

片倉 国籍を取らなければならないというのは、もちろんその国の事情にもよるだろう。

高橋 インドネシアのように取らざるをえないという場合もある。

片倉 華人の同化というか、居住国の国籍を取るような例は増えているのか。

高橋 一世がいなくなる中で、これから生まれる世代というのは、その国のナショナル・アイデンティティを一応身に付け、その国の

国語を話す、というパターンが増えていくと思う。

立本 しかし、華人にとって国家によるアイデンティティなどは重要でないと思う。自分の子供の居住国を、例えば、一番目をフィリピン、二番目を香港、三番目をオーストラリアというように分けたりする。

片倉 そうするとアイデンティティは全くないのか。

立本 華人としてのアイデンティティがあっても、三代目、四代目などの世代で分離があるだろう。同化するのであれば、まだ望みのあるシンガポールを選ぶといった、華人のしたたかさがある。

ネットワークの拡大

坪内 少し話題をかえたい。ネットワークの政治性についての話が中心になっている。これはおもしろい話であるが、総合的地域研究の立場からこれをどこに位置付けるのか、と考えると次の疑問が出てくる。つまり、これは地域研究なのか、地域間研究なのか、それともどちらもやっていないのか、ということである。ネットワークと地域との関係はどうなっているのか。ネットワークについて議論するのであれば、それは地域研究、あるいは地域間研究とどう関連するのかを考える必要がある。ネットワークがある、海域世界がある、都市がある、というようなことはよく分かる。では、そのことと、私達の地域研究

とはどこでリンクしているのかを整理して、それから議論を進めるべきではないか。

家島 今日の私の話は、まさにそのことを言いたかったのである。つまり、ネットワーク社会を考える際に、それを地域性なり、地域といったものの中にどのようにトレースしていったらよいのか、ということ考えたのである。

鈴木 東南をアジアをベースにして地域を考える時、どちらかという、まず生態的環境をおさえる。その上で、人間の暮らし方を見て、それが同じであれば、そこの人々は、同じような考え方をし、同じような意識を持っている。そこにひとつの独自の世界ができ上がる、という形で地域を捉えていたように思う。イスラーム圏から見ると、同じような行動様式、考えを持った人々が、動きだして、お互いがネットワークを作り上げる。そこでは、同一タイプの人々が、非常に濃密なネットワークを作っている。そして、それが拡大している。それが地域になっているのである。

坪内 その点が私にとって興味深い。次に、東南アジアにもアラブ人がやってくる。それは、アラブ社会がそこに出来ていることになるのだろうか。実際にはそうではない。東南アジアの都市を考えると、例えばシンガポールなどでは、アラブ人が住んでいるが、アラブの都市になっているのではない。レジュメの地図を見るとインド洋におけるハドラーミー・ネットワークとしてブルネイやポンティア

ナックがある。たしかに、それはアラブ人の拡がりである。しかし、それはどういう形かというと、そこに住むそれぞれの人がコミュニティをつくっているが、そのどれかが、都市全体を支配したり、性格付けたりするのではない。それぞれのコミュニティは、ある種の機能を果たすひとつの部分として存在している。これが、東南アジアの特徴なのである。アラブ人に限らず、中国人のコミュニティについてもそれが言える。そして、それぞれの上に東南アジア的な支配者が乗っている。さらに、その支配者に結び付く形で、内陸部の社会もつながる。こうしてネットワークが出来上がっている。

小杉 たしかにアラブ人クォーターはあるにしても、家島さんのお話は、イスラーム・ネットワークとその個別バージョンとしてのハドラーミー・ネットワークについてであって、アラブについてではない。それで、華僑・華人の場合はどうなのかを聞きたい。

坪内 私が調査していたアロールジャングスの村では、多くが福建出身者であった。福建のある村から来た人である。同じ村から次々と人を呼び込んでいる。その連絡はつい最近に至るまで続いていた。その意味では、同じような構造があるともいえる。

小杉 それは華僑・華人の中だけに当てはまるように思う。ハドラーミー・ネットワークの拡がりについて言うと、アラブ人クォーターにとどまらず、イスラーム・ネットワークが

さらに広がる。インドネシアをイスラーム化するような構造があるという点で、華人のネットワークとは異なっている。

鈴木 アラブ人がディアスポラ的に広がることとイスラーム的なものが浸透するという二つの層がある。

坪内 アラブとイスラームを区別しようという話が先にあった。そして、イスラーム教はとりあえずおいておくということだったと思うが。

鈴木 例えば、文字について言うとマレー語は、もともとサンスクリット系文字を用いていたのが、アラビア文字を使うようになった。このように顕著な文化変容がみられる。そこには、文字を通じたネットワークがある。

いろいろのネットワーク

高谷 少し話が高等になってしまった。ここでシンプルな図を出してみたい。ネットワークとはクモの巣のようなものである。中東で考えると、どこまで行ってもクモの巣ばかりになっている。獲物もかかっていない。東南アジアの場合、森があり、そこで採集をしている人々がいる。クモの巣は、外側にチョロチョロとある。こういう感じだろうか。東南アジアには、何かネットワーク以外のものがある。そんなイメージなのだが、純粋なネットワーク論から少し離れて、もう一度中東と東南アジアという話に戻ってもらえないか。

片倉 坪内さんが問題にしておられるのは、

いまネットワークに議論の焦点が置かれている。それと地域研究はどう関係しているのかということだろう。ここで、簡単にその経緯をまとめる。まずはじめは、「地域」から出発した。いまや、国民国家を単位にして世界を考えることは出来なくなっている。高谷さんが世界単位論で述べておられる前提から始まっている。高谷さんが提起されたのは、同じ価値を共有している人達の地域——世界単位——を求める、ということである。要するに、価値観を共有していることが基本である。そうすると、私達のほうの中東について地域を考えると、価値観を共有する単位が地域ではなくて、どうも「人」にあるという認識が出てきた。そこで属人的という言葉を使った。そして、その属人的であることを成り立たせているのは何かという話から、ネットワークが出てきたのである。今日の家島さんのお話が大胆であったのは、ある意味では地域を否定していることである。そこでは、ネットワークをメタ地域と言っても良いかもしれない。いま問題としている地域は、「地域を否定した地域」であるように思う。

応地 地域研究か地域間研究かということは別にして、片倉さんがおっしゃったような文脈で、中東班はネットワークを前面に押し出して来た。そしてそれは、人間の世界、人間が作り上げた都市の世界であり、高度に文明化された世界であるとおっしゃった。その時に、ネットワークという言葉だけ取り上げる

と、例えば、東南アジアの場合でも、海域世界についてネットワークということが語られるし、また、南アジアからみるとインドのカースト社会などはまさにネットワーク社会である。しかし、中東のネットワークは、その中に住んでいる人々が、それぞれに正当性を認めあう社会である。つまり多元的である。それが前回のひとつの結論であったと思う。インドの場合はヒエラルキーがある。それ以外の価値は認められていない、といっても言い過ぎではない。つまり、ネットワークという言葉は、共通項的にひとつのターミノロジーとして用いるけれども、その中身の違いを比較して、地域の差が議論出来るのではないか。それで、いま中東におけるネットワークの中身を聞いた上で、では東南アジア海域世界におけるネットワークの中身はどのようなのか、となる。そこで、地域間研究が始まるのだと思う。

坪内 私も同じように考えている。ただ、ネットワークという平たい言葉ですべて切ってしまうのは恐いということ是指摘しておきたい。先に高谷さんが、東南アジアではクモの巣であるネットワークが、外側、港でくっついているだけであるとおっしゃった。ここではネットワークの意味がかなり異なっている。東南アジアで発達して、東南アジアで形成されるネットワークが存在するとすると、中東で発達した、中東独自のネットワークとの違いは何かという点は興味深い。

片倉 私はネットワークという言葉を実はあまり好まない。というのは、ネットワークに網というクローズドなイメージがでてくるからである。そこで、私は属人的という言葉を使った。思考様式などが、基本的に人に属しているのか、器で決まるのかということである。応地 決まるとか決まらないとかではなく、どちらが対象を考える際に分かりやすいかであろう。

片倉 そうだ。だから、東南アジアの場合は、まず生態、つまり器を見ていけば、そこに住む人間がどのように考えているのかが分かっておっしゃっているのだろう。

立本 それは自然環境決定論になってしまって少しおかしい。東南アジアをみると、器からか中身からかということについて、それは器だと、高谷さんや古川さんはおっしゃっているのだが、東南アジアについてもともと問題であったのは、生態というものが器としてのまとまりを持たなかったこと、つまり器が無かったことなのである。中国やインドのような器が無いところで東南アジアをどうみるかということである。地と図ということ考えて欲しい。図というのは、例えばネットワークである。地の上にその図が描かれている。その図を東南アジアで考えると、やはりネットワークというのは大きな図である。ネットワークはクローズドであるといったが、それは濃淡で成り立っている。関係というのは強いところと弱いところがある。インド洋

を繋ぐのとマラッカ海峡を繋ぐのとでは、そのつながり方は違う。ネットワークの濃いところと段々薄くなっていくところがあるということである。そう考えればやはり、東南アジアのある部分は、ネットワーク社会として括ることが出来る。そしてその上で生態をみると、これは生態的に説明が出来るのではということになった。外側からみると、私達は器を基に議論しているという印象になるのかもしれないが、出発点は器ではないのである。片倉 そうすると、先に言っていた東南アジアのネットワークと中東のネットワークでの、そのネットワークは何か違いがあるのではないかという議論は可能か。

ネットワーク：都市／海

立本 それを言いたいのである。今日の家島さんのお話の二番目にあったイスラーム都市ネットワークでは、移動の動機をイスラームが与えているということが示されている。三番目の海のネットワークは、海が創っているといわれる。つまり、今日の話では、海が創るネットワーク、イスラームが作るネットワーク、都市が作るネットワークの三つのネットワークが出て来た。イスラームと都市のその結び付きは分かるが、その二つと海のネットワークがなぜ結び付くのか、あるいは両者の質の違いについて疑問がある。あるいは、イスラームの拡大として海のネットワークは捉えられているのか。そこで東南ア

ジアの海域世界のネットワークとの違いが分かってくる。

家島 海というのは、特殊な空間であると考えている。海そのものが、独自のネットワークである。関連の世界である。

立本 特殊な空間というのは、何に対しておっしゃっているのか。例えば、陸から見て特殊だというのであれば、東南アジアから中国に対しての南シナ海も特殊な空間、インド洋も特殊な空間というように同じになってしまう。

家島 海という場の様々な特性を考えなければならぬということだ。

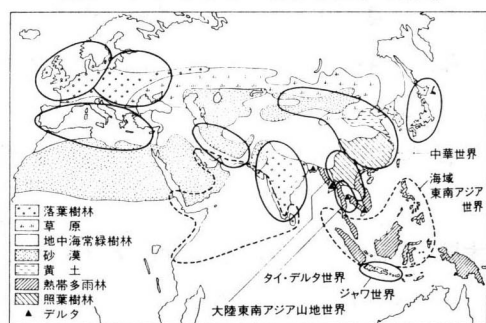
大塚 立本さんが今まとめられたように、三つのネットワークがある。そして都市とイスラームが重なっているのではないかとおっしゃった。むしろ私は、イスラームのそれは少々質が違うのではないかと思う。逆に、海と都市とは重なる、つまり、海港というのは都市である。

立本 今日のお話では、港市と都市は一緒であった。

大塚 原都市という考え方では、都市と港には共通性がある。つまりノード(結節点)という点である。そうすると海が特殊な空間かどうかということでは、中東の場合砂漠と対置させて考える必要がある。もう一つ地域ということで言うと、明らかに中東と東南アジアはともに地域概念である。そして今日家島さんが話されたのは、中東地域をイスラーム・

ネットワークから考えていこうということである。東南アジアの海域ネットワークの場合、高谷さんの世界単位区分によると東南アジアの一部でしかない。今日の話では、中東、もしくはイスラーム社会を主語にして考えて、それは全体的にネットワークによってある程度はおさえることが出来るだろうということであった。東南アジアの場合、高谷さんの区分図で考えるのであれば、海域ネットワークの社会は、その一部である。そこでは、港を都市と考えれば確かに同じネットワークである。しかし、東南アジア全体のネットワーク、あるいはそこから広がるネットワークがあるのかどうか。東南アジアを主語にした場合、ネットワークで捉えることが出来るのか、それとも海域という特徴によっているだけなのか。

東アジアにおける「世界単位」の分布



高谷好一, 1993『新世界秩序を求めて』中公新書.

立本 高谷さんの図はかなり生態的にまとめられていて、細かい。私達が言っている海域ネットワーク世界は東南アジアから南シナ海を含むもっと広い単位である。

大塚 大陸部はどうか。

立本 あまり含まれないが、川があればそれを遡ってつながる。

古川 高谷さんの図でも海域は点線で括っている。つまり、どこまでつながるのか分からないということである。

東南アジアのイスラーム化

小杉 一つどうしても確認しておきたいことがある。東南アジアではネットワークは、一部に引っ掛かっているだけだとおっしゃった。ハドラーミー・ネットワークはイスラーム・ネットワークの一つのバージョンとして広がっている。インドネシアもマレーシアもそれでかなり覆われる。イスラーム世界が成立してしまえば、東南アジアにしる中東にしる消滅してしまうことになる。そうでなくてもよいと思うが。そこで確認したいのは、東南アジアにはかなりイスラームが広がっている。それはなぜか。それを明らかにしないと、イスラームが浸透しても、イスラーム・ネットワークが広がったのかどうかは議論できない。東南アジアのイスラームとは一体何なのか。

立本 インド化にしる、イスラーム化にしる、それは非常に難しい問題である。

坪内 むしろ逆に質問したい。東南アジアのムスリムは、中東のムスリムと同じなのか。

立本 ムスリムの定義についてうかがいたい。

小杉 それには、すでにイスラーム化という

のはイスラームの地域化とセットであるというテーゼを出している。同じであって違う、違って同じということである。つまり、イスラーム化した以上は同じ部分がある。東南アジアの特性の中で、同じになってしまったのは何かということである。

高谷 なぜ東南アジアではイスラームが広がったのか、という質問に皆に答えてもらおう。

古川 社会的練度の高い人達が、金儲けと称してやってきて、コミッションをばらまいて、商売をやった。要するに、熱帯多雨林には様々な産物がある。そこに社会的練度の高いこすからい人達がやってきた。東南アジアはアニミズムの世界であるから巻き込まれてしまう。

立本 東南アジアのイスラームをどう考えるのかに簡潔に答えるのであれば、東南アジアではイスラームは宗教になってしまったということである。例えば、イスラームはディーン(din)という言葉ではなく、アガマ(agma)というサンスクリット起源の言葉で示されている。要するに、生活と宗教が一体になったシャリーア、ウンマといった形ではなく、「宗教」として扱われている。一様ではないが、地域が東にいくほど、だんだんシンボル的になっている。全体として言えば、単なる宗教になっているのである。

小杉 それはよく分かるが、単なる宗教になるとなぜ浸透するのか。

立本 宗教をどのように選択するのかは非常

に難しい問題である。

高谷 浸透していない。

立本 薬をもらうためとか、まじないをするためとか、はくをつけるとか様々であろう。

片倉 それは生活とは違うのか。いわゆる宗教と言え、単純に魂の救済とかいうことであろう。

立本 そういうことを言っているのではない。東南アジアでは、元来のイスラームのようにイスラームが生活全体を律しているのではないということである。

片倉 ではなぜ浸透したのか。

立本 浸透したのは、イスラームそのものがどうであるからではなく、様々な外部的な条件のためである。チャンス、偶然である。

小杉 偶然であんなにも広がるのか。

加藤 やはり、歴史的タイミングを考えなければならぬ。11世紀に広州で10万人のムスリムが殺されている。その頃に東南アジアにイスラームが広がっていた形跡はない。13世紀頃によくスマトラにイスラーム国家ができる。ここに、歴史的タイミングを見ることができる。一つには、元寇によって強いヒンドゥー的な国家が崩壊したことがあり、もう一つはセラミックロード、海のシルクロードの重要性がこの時期に高まったことがある。そういう歴史的状況を考えないと、なぜ東南アジアでイスラームが受容されたのかは理解できない。イスラームが島嶼部で広まる時期と、大陸部で上座部仏教が広まる時期とは、

時代的に近い。ヒンドゥーからのパラダイム転換が、12世紀から14世紀にかけての東南アジアで起こったのであろう。

小杉 そうすると、まさにそうした歴史的状況が非常に有利に作用する中で、イスラーム・ネットワークが東方に拡大した、という議論になるのではないか。

鈴木 イスラーム世界そのものが、11世紀後半から14世紀にかけて中東の外に向かって再び拡大していった。インド、アナトリア、東南アジア、東・西アフリカへと広がっていく、イスラームの拡大期でもあった。

坪内 その拡大は、同じ原理で拡大したのかどうか問題であろう。つまり、中東に存在し、機能しているイスラームの原理と東南アジアのそれとが、同じなのかということである。異なる面があるのではないか。

上岡 先の立本さんのお話に関連していると思うが、ブギス人の場合イスラームから他の宗教への改宗者が非常に多いとインドネシアのある研究者から聞いた。中東ではそうしたことはほとんどない。ヨルダンなどでは改宗したことを公にすると死刑になるとも聞いた。やはり宗教の捉え方が、中東と東南アジアでは違っているのではないだろうか。

立本 スラウェシのブギス人のイスラームへの改宗は16世紀に入ってからのものであるが、伝説によると当時の王が、イスラームとカトリックの両方に使節を送り、早く戻って来たほうに改宗すると告げ、イスラームへの使節

が早く戻って来たので彼はイスラームを受容したと言われている。なぜその後拡大したのかというと、王はイスラームをシンボルにして、聖戦、ジハードを戦い、南部に勢力を広げていったからである。マレーシアの場合は、ポルトガルの残虐性に対抗するためのシンボルとしてイスラームが使われ、広まったと考えられている。つまり、イスラームが良いから広まったのではなく、歴史的な偶然が重なったためにイスラームは広まったのである、とみた方が妥当であろう。上岡さんの質問については、ブギスがそうであるかどうかは別として、一般に改宗に対して寛容である地域は多いと言えよう。イスラームの捉え方が違っているのであろう。

鈴木 イスラーム教徒が他の人々を支配しようとする時は、聖戦によるのであるが、必ずしも改宗はさせない。

立本 それはイスラームであって、ブギスの場合は王が改宗させたのである。

鈴木 聖戦で行った先はすべて改宗させたのか。

立本 そうだ。だからスラウェシ南部はすべてムスリムになった。上から下へと広まった。つまり、まず王が改宗し、次いで王が連れてくるイマームなどが民衆を改宗させ、そして民衆からもイスラーム学者が出るようになるのである。

片倉 東南アジアの場合、まず上流階級にイスラームが入っていくという形で広がる。

立本 ふつうは、まず王権層や大商人などに入る。それは、その当時ムスリムが非常に活躍していたから、改宗したほうが得であると考えたからであろう。

ネットワークの地域差

小杉 地域を考える際に、そうした違いを話してもだめだと思う。イスラーム・ネットワークは、中東にある時は均質であるのが、東南アジアにくるとその質は違っている、という議論になっている。それは妥当ではない。なぜならハドラーミー・ネットワークはハドラーミー的な特徴があるし、西アフリカでも北アフリカでも若干質は異なるのである。そして、偶然というならば、それはどの地域についても同じことであろう。イスラームのどの要素が人々を魅きつけたのかも異なっている。イスラーム・ネットワークで議論をすれば、どうしてもそれはトランスエリアであるということになってしまう。

鈴木 地域の定義そのものが問題である。地理的ではなく、人間関係論的なものとして定義したほうがよい。

坪内 その定義だと、日本も中国の一部になる。先の話に戻るが、華僑ネットワークとイスラーム・ネットワークの二つのネットワークについての議論があった。華僑ネットワークも同様に人間原理で重なっていくのか、あるいは質の異なるネットワークなのか聞きたい。

高谷 応地さんが、ネットワークの中身につ

いて議論する必要があるとおっしゃった。中東はネットワークではある。それは確かなようだ。一方応地さんは、インドも同様にネットワークだと見ることもできると言われる。これは驚きだ。それぞれがイメージしているネットワークの中身が違うらしい。

応地 人間のいるところであれば、どこにでもネットワークはある。その意味では、ネットワークのない人間社会などは存在しないと思う。以前のイスラームに関する研究会で次のような結論が出た。それは、イスラームの社会というのは、それぞれの人にそれぞれの尊厳、あるいは正当性を認めあう、多元的な価値観に基づいたネットワーク社会であるということであった。それに対しインドのネットワークを考える場合には、カースト制がすぐ挙げられる。単純化して言えば、カーストとは一元的なヒエラルキーをもったネットワークの中にある。海外のインド人を見ても、そうしたネットワークを保っているところでは、彼らは母国語を大事にし、そうでなければ同化していく。こうした形で、先に鈴木さんが述べられた文化変容も、そのプロセスが異なっている。このように、東南アジアのネットワークもどのような内容であるのか話していただきたい。要するに、東南アジアの社会は、来るものは拒まず、去る者は追わずという自由に往来できるようなネットワーク社会であるとおっしゃっているが、それはイスラームについても同様である。それが、イスラーム

ム自由都市論の基本的な考え方である。そうすると両者のネットワークを、全く同じものとして考えてよいのか、が問題になる。この点について議論して、もし違いがあれば、それは地域の問題になるし、違いがなければ、ネットワーク論で組み立てなおせばよい。

鈴木 まだ議論は尽きないが、ここで終了にしたい。「イスラームと地域」という題で大塚さんから話題提供があり、また総合討論もあるので、この議論は次の議論につながると思う。